宗像

毎月五日十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311㈹
定価 一年送料共 1000円

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園二―三一(〒812)
電話 福岡(092)六五一―九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入(〒600)
電話 京都(075)三二三四―三三四一番

秋季大祭斎行

威風堂々のみあれ祭
四百隻の船団が海上神幸

「神郡宗像」の秋を彩る秋季大祭「みあれ祭」が、十月一日勇壮に斎行され、玄海洋上に宗像水軍の偉容を髣髴とさせる海上絵巻が繰り広げられた。

当日早朝より大漁旗を飾り付けた宗像七浦の漁船が、「みあれ祭」を奉仕すべく続々と大島港に集結した。

一方今年は絶好の祭典日和に恵まれた上、一日が日曜日ということもあって神湊港附近は勿論、鐘崎から神湊迄の海岸線は、この勇壮な海上神幸を拝観せんものと例年以上の人出で埋め尽された。

午前八時三十分、中津宮出御祭を斎行、大島小学校児童の鼓笛隊が先導して、沖津宮・中津宮の御神璽を奉安した神輿が海洋神事奉賛会の青年達により大島港迄パレードを行い、御座船の第十八辛丸（鐘崎・沖津宮船）と沖之島丸（大島・中津宮船）にそれぞれ安置された。

午前九時三十分、花火の合図と共に、一片の雲の影もない抜けるような秋晴れの空、鏡のような紺碧の水面が広がる海上に「波切御幣」を船首に載き、大漁旗を掲げた満船飾の船団が、先導船を先頭に御座船・供奉船と一斉にエンジン音を轟かせながら、白波を立て次々と大島港を出港した。

約四百隻の大船団は、地ノ島方面に進路を取りながら進行、鐘崎沖で神湊港へと進路を変更、先導船の神職が祓清める大海原を約一時間をかけ「国家鎮護宗像大社」の大幟を掲げた御座船に従うようにして神幸した。

午前十時三十分、花火船より神湊到着を知らせる号砲が打ち上げられ、御座船の第十八辛丸と沖ノ島丸が神湊港に入港接岸した。神湊では沖・中両宮の御神璽をお迎えすべく、辺津宮の御神璽もすでに着御されており、養父宮司以下神職が勢揃いして御座船の到着を待っていた。

御座船より沖・中両宮の御神璽が降船されると、到着を今や遅しと待ちかねていた多数の参拝者の拍手が一斉に鳴り響いた。

かくして神湊魚市場に、宗像三宮の御神璽がお揃いになられた後、三女神を奉安した三台の神輿が、沿道を人々が埋め尽くす中頓宮へと参進、頓宮祭が厳粛に斎行された。

頓宮祭終了後、三宮の御神璽は御座車にお移りになられ、田島の辺津宮へと陸路を神幸、正午過ぎに入御されて「田島放生会」と称され親しまれている、郡民待望の当大社秋季大祭が幕を開けた。

七五三祭の御案内

毎年十一月十五日に数え年三才の男女、五才の男児、七才の女児をつれて神社に参拝し、今日までの無事発育を感謝し、更に将来の成長を祈願するお祝いです。

昔は三才の男女は髪置、五才の男子は袴着、七才の女子は紐解きの祝いが行われていました。この我国古来の慣習を今日に伝えるのが、七五三祭です。

当大社でも、お子様の健やかな成長と幸せを御奉告する、恒例の「七五三まつり」を、本年も左記により盛大に執り行いますので、皆様お誘い合せの上御参拝下さいます様御案内申し上げます。

記

期　間　平成元年十一月一日～十一月十九日
（尚、この期間以外でも、おまつりは行っております。）
初穂料　一件（一人）三〇〇〇円
一名増すごとに二〇〇〇円の追加となります。
授与品　御祈願お申し込みのお子様には、お守り、千歳飴、御幣等を授与致します。

八月十五日への想い

間もなく八月十五日がやって来る。昭和二十年のその日から、数えて四十五回目にもなる。戦争を知らない世代が人口の半ばを超えてすでに久しいことを思うと、終戦の意義について考えようという訴えも、国民の多数にとって迂遠な課題になってしまったと言えるのかも知れない。八月四日に行われた今上御即位後初の内外記者団との御会見で、戦争責任や新憲法問題への御感想が求められたのも、裏返せば、いわゆる戦後に区切りをつけたいと願う心の表われだったと見られなくはない。

もちろん我が国の歴史に決定的な傷跡を残した大戦争の事実を、戦中派以前の世代が忘れることなど出来はしないし、戦後派以後の世代にその事実を伝えてゆく責任のあることも否定しえない。しかし問題は、それを伝えようとする者たちの姿勢なのである。

○

まづ第一に指摘しておきたいのは、大東亜戦争を我が国の一方的な侵略戦争と極めつけて顧みることのない姿勢に隠された問題である。このような考え方は、一つの事柄について真実・真理は一つしかなく、敵対する者の一方は正しく、当然他方は悪であるとする発想に基づいている。宗教に例を取れば、それは唯一絶対神を信奉し、他に一切、神の存在することを認めない信仰類型に属している。しかしそれは実のところ、神の理解にのみ属することであって、超越的一神を奉ずる場合でも、プロテスタントがカトリックの教皇制及び教会・司祭の特別な権威づけを、有限なるものの偶像化として批判するように、被造物たる人間の営みを一方的に裁断する行為として、批判されるべきはずの考え方なのである。まして我が民族は、元来多神、つまり多くの価値、多くの真理が共存調和する文化の中に生きて来た。一寸の虫にも五分の魂と言い、喧嘩両成敗を紛争処理の理想として来たのは、この世に完全なものはありえない、事柄には必ず善悪の両面があり、人には長短の気質能力が隠されていることを知り、もしそれを忘れた時、人も事も極端に走り、全体の調和を失って恨みを残すと考えて来たのではなかったか。

西洋文明に接した後の日本、特に敗戦後の日本人は、この心を失い、悪しき西洋に魂を侵されていると言えるのではないだろうか。

○

第二に指摘しておきたいのは、大東亜戦争を侵略戦争とのみ断罪することに関連して、戦場に死した兵士たちを犠牲者と呼び、自己の意志に反して戦争へと駆り出され、非業の死を遂げた人びとである故に、この世に怨念を残して逝ったと広言して憚からぬ姿勢についての問題である。戦死者は可哀そうだとする見方も、同質だと言わなければならない。

中国大陸で戦傷を負った筆者の区隊長は、「好い奴ほど早く死んで行った」と繰返し言っていた。サンケイ新聞に連載中のインタビュー記事で、現ダイエー社長中内功氏は、下士官として従軍したフィリピンでの経験について、ほぼ同じ主旨のことを述べている。同氏は殆ど部下を死なせたことから、恐くて靖国神社には未だに参拝できないでいるとさえ告白しているのである。

もちろん敗色濃くなった戦争の末期、南方諸島で飢えのために死んだ兵士たちへの想いは、筆舌に尽し難い。しかしそれを無駄死になどと広言することが、生き残った者たちに許されるべきでないのは明かである。彼らもまた、日本の兵士としてより良く生きようとしたに違いないからである。それを否定することは、死者を辱しめることに外ならないと言って誤りはないだろう。

○

大切にしなければならないのは、魂の問題である。我われの命は遠い過去からの歴史を荷って生きて来た父祖以来の営みの中にあり、共同体としての国家に支えられてこそ有りうるのである。死者は過去のもの、自分の生命は自分一人のものと考えるのは思い上がり以外の何ものでもない。国のために死んだあの戦争での死者たちは、今も我われと共に生きている。そのことを忘れないためにこそ、死者への祭りがあるのである。

戦後の日本人が失った最大のものは、あの戦争に死んだ人たちがそれを心の誇りとして生きた「国と祖先のために」という心である。

八月十五日を迎えて、我われは死者たちの前に、恥しくない生き方をしたいものである。

（神社新報より）

余滴

最近、玄海レクリゾート問題が大きく取上げられて神湊海岸では、ホテル・分譲マンションの建設が始まり、急にあわただしくなって来た。

大社鎮座地の田島地区でも、国民休暇村、長期滞在型大型ホテル。ゴルフ場、又、一、〇〇〇戸を越える大型宅地開発等が次々に計画され、それに投資される民間資本は、一、〇〇〇億円とも、一、五〇〇億円とも云われている。

この開発について、祖先伝来の田畑、山林を守り、豊かな、恵まれた自然風土を破壊すべきではないと、災害・環境汚染の問題を取り上げ、かたくなに反対する人等と、世界の経済構造の変化により年々疲弊してゆく農山村、老人のみの村、無用の長物と化した山林、ミカン畑も、地域の経済浮揚・村おこし・雇用確保のためには、大資本の流入として大型開発を行うべきだとする人等、人さまざまに反対、賛成百論噴出し、将来の展望は全くの闇雲の状態である。

この開発問題にからんで、今から約七百五十年前の鎌倉時代に大宮司氏が定めた、俗に十三ケ条憲法とも呼ばれる事書条々を再考してみたい。この憲法には、軍事・納税・漁業権、又、水利のことまで詳細に定めてあり、特に、治山・治水と生活権の確保の事を勘案しながら、神社周辺の山々を禁制地とし、垂見山、山田山の入合権を認めるなどして、環境破壊を防ぎ経済浮揚に心を配った大宮司の深謀にはただただ驚嘆するのみである。「温故知新」、心すべき名言である。

第三四〇回 宗像大社歌会詠草

中村吾郎選

毎月末日〆切

香椎　桜井　ツ子

蓮葩も木瓜もけぶれる今朝の雨温くして雉鳩の啼く

（評）初二句の具体的なりあげ方が雉鳩の啼声までも明らかにする。句間のつながり具合も密である。

八幡東　江口　妙子

雨あとの風冷やかけき畑の中分葱の新芽青々とのぶ

（評）題材としては何でもない事だが、下句の端正な表現が心惹く。雨後の風に吹かれる分葱が目に顕つ。

自由ケ丘　後藤　君代

白鷺は水に降りざま一瞬に鯰をくはへて仰向きに食む

（評）一瞬の出来事を捉えて息もつかず詠みあげ、鷺が躍動した。四句から五句への流れも無理がない。

田　熊　鷲頭かつ代

渺渺たる北山ダムのまぼろしにたつは湖底の家や田や畑

福　間　清原　絹代

軒先に雨の晴れ間を濯ぎもの影黒ぐろとしきりに踊る

東　郷　藤崎　辰子

後になり先になりして斑猫と尾花の道を海沿ひにゆく

戸　畑　田中ハツセ

露草の藍ひときわ冴ゆる朝彼岸に入りて吾蘇る

田　熊　力丸　一郎

米寿となる今日敬老の祝日に行政機関の祝辞を賜ふ

八幡西　川崎　ウラ

すみやかに霧の流れて浮び出づ有馬牧場二百頭の羊

原　町　八波　五月

遠まはりして作道を帰り来る女婦は友と自轉車押して

吉　留　高山　信子

バスに逢ひし野良着の友と短き会話交し別るるほのぼのとして

機上なる不安を忘れアルプスの輝く冠雪見つつ吾をり

田　久　立花　勇雄

腰を曲げ後手くみて行く妻のあと追ひ曽孫は真似してあゆむ

福　間　広渡二寿軒

帆まかせのヨットもサーフィンも心せよ悲喜交々の海の明暗

池　田　小田　イセ

われの先走りし犬は捕えられ目を覆ふばかり連れ去られけり

大　島　目原　節子

冷へながら岸壁浸す夕つ波友の遭難いまだ不明らず

吉　留　白木うめの

限りある命を時に忘れて栗の苗木を畑に植つる

八幡東　大塩ミヤ子

持ち寄りて茶菓に雑談さざめきし友を送れば半月淡し

武　丸　立石ろせ乃

来る年も又咲きくれと願ひつつ古葉を切りぬき庭の芍薬

八幡西　山田　耕夕

変りなき親しさ運び来し友よ八幡を去りて十年目の今日

池　田　小田しめの

還らざるふたりの兄よわがうちに消ゆることなし昭和逝くとも

小倉北　横原　静子

秋祭り幟の下の綿菓子や柿を食みて各待ちてをり

大　島　屋形トミエ

咲き残る紫陽花も早や色褪せて過疎続く島に夏逝かんとす

八幡東　岡本　初音

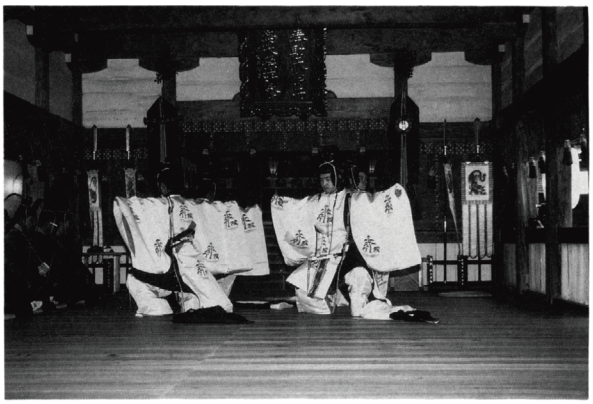
脱皮せし蟬の抜け殻集めきて孫熱心に室にこもれり

福　間　二宮　末子

月明り人の前に影があり人の後に我が影がある

田島放生会

好天に恵まれ大いに賑う



平成初年の神郡宗像に秋の訪れを告げる秋季大祭が十月一日より三日間に亘り、清々しい晴天の下、盛大且つ厳粛に斎行された。

先ず九月二十八日、地元総代、協力会並びに沖中両宮奉賛会・同翼賛会の奉仕により、〆縄の張替え、紫幕、幟の飾付け等、境内の諸準備が行われ、続いて三十日午後五時総社地主祭、同六時、養父宮司以下神職奉仕のもと宵宮祭が斎行され、大祭が無事執り行われるよう厳かな祈りが捧げられた。

十月一日午前九時、辺津宮出御祭斎行。同九時三十分には沖・中両宮の御神璽を奉戴した御座船を始め、約四百隻の大船団が大島港を出港。同十時三十分、三宮の御神璽が揃った神湊の頓宮に於て、頓宮祭を斎行。その後神湊から田島迄、自動車による御神幸を経て辺津宮に入御された。

本年はみあれ祭が日曜日となった為、道路は多数の見物者で混み合い、予定より三十分遅れた十二時過ぎ、辺津宮に於て入御祭斎行。宮司の朗々とした国家鎮護、五穀豊穣、大漁を祈念する祝詞奏上に続き、地元青年団による風俗舞が奉納された。続いて氏子会長を始め、参列された各代表が玉串に託して敬虔な祈りを捧げ一日祭が無事終了した。

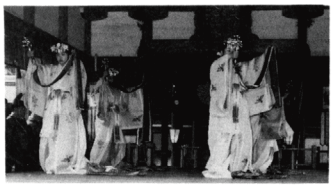
翌二日、伝統の流鏑馬神事で二日目は幕を開けた。午前八時、清めのお祓いを受けた三人の射手により操られる神馬が次々と疾走し、早朝の境内は一射ごとに多くの観衆からの拍手で鳴り響いた。

同十一時、二日祭が斎行され、大勢の崇敬者等が見つめる中、神社庁宗像支部長大澄光信宮司（諏訪神社宮司）外一名による郡内神職奉幣の儀、宮地嶽神社献幣使、氏子奉幣使柴田福造氏による奉幣詞が奏上され、約五百年の伝統を誇る翁舞が、福岡喜多流の人々により災難消除、延命招福を祈念すべく厳かに奉納された。

十月三日午前十一時、総社祭が斎行され、玄海中学校女生徒奉仕による浦安舞が奉納された。

引き続き高宮祭、第二宮・第三宮祭、護国神社秋季大祭がそれぞれ斎行され、県議、市町村長、議長を始め宗像市郡の遺族会員ら多数参列し、護国の英霊を慰め、靖国の神として新しき平和日本の繁栄と、遺族の方々の隆昌をお護り下さるよう祈念された。

午後二時からは、拝殿に於て南坊流献茶祭が斎行され、滝口社中の代表の鮮やかな御点前にて濃茶が立てられ、御神前に供えられた。



かくして平成元年度の秋季大祭は晴天の中、多数の参拝者を集めて滞りなく終了し、神郡宗像の稲穂や草木も秋の色を深めていく。

当大社責任役員に

木本元敬氏就任

吉本弘次氏の後任として

昭和四十八年より十七年間の永きに亘り、当大社発展の為御尽力戴きました、西日本鉄道株式会社相談役吉本弘次氏が、当大社責任役員を辞任されました。

その後任として、同社会長木本元敬氏が九月一日付で当大社責任役員に就任されました。

木本氏は、大正九年北九州市生まれ、昭和十六年京都帝国大学経済学部を卒業、昭和十七年西日本鉄道株式会社の前身である九州電気軌道株式会社へ入社、同年召集により帝国陸軍へ入隊、昭和二十年召集解除と同時に復職、昭和五十六年西日本鉄道株式会社社長に就任、同六十年には会長に就任され現在に至っておられます。

同氏は福岡県交通安全協会・福岡県経営者協会等の会長も兼任されており、非常に多忙な毎日を送っておられますが、「交通安全の神様」として皆様に崇敬されている当大社といたしましても、地元経済界の重鎮である同氏に責任役員御就任を懇請、快くお引き受け戴きました。

今般木本氏の責任役員御就任により、当大社に於きましても吉本氏同様、地元各界との密接な連携を図りつつ、御神徳の発揚により一層力を注いでまいる所存です。

〔ご案内〕

十一月の各種神賑行事

第十九回　西日本菊花展

当大社境内に九州・山口各県の菊花愛好家が丹精込めた銘花三千鉢が、特設展示場に咲き競います。大輪・懸崖・盆栽・総合花壇等美事な菊花ばかりです。御家族お揃いで是非ご観覧下さい。

期　日　十一月一日～十一月二十三日迄
会　場　境内全域（夜間照明有）
表彰式　十一月十九日

第三回　宗像名刀展

いよいよ宗像も菊が到来する季節となりました。菊花大会に併せて開催する「宗像名刀展」も、三回目を迎えます。「菊と刀」には人を引きつける魅力があり、古くから我々日本人の心を大きく、深くとらえて離さない力を持っているようです。

今年も多くの崇敬者の方々の御協力を得て、鎌倉時代から現代までの直刀・大刀・剣・刀・短刀・脇差・槍・長巻等の六十余振の刀剣類を展示する事が出来るようになりました。どうぞ御期待下さい。

期　日　十一月一日～二十六日
場　所　宗像大社神宝館一階
拝観料　三百円

第十八回　奉納剣道大会

七百余名の男女剣士が、出場し、熱戦を繰りひろげ、宗像地区の最高剣士の栄誉を競います。

期　日　十一月三日
会　場　午前九時より本殿横境内（雨天の場合は玄海中学校体育館）

第十五回　奉納吟剣詩舞大会

この吟詠大会は本年第十五回目を迎え、本部を熊本市に置く清香吟社（会長・益中鵬山氏）社中の会員百余名が参加し奉納する吟詠大会である。皆様御誘い合せの上御来場下さい。

期　日　十一月三日
会　場　午前八時三十分より清明殿

第十六回　宗像大社本因坊戦

宗像地区の囲碁愛好家が一堂に会し、その年の実力ナンバーワンを決める大会であり、年々充実した大会となっています。

期　日　十一月五日
受付時間　午前九時三十分から五十分迄

第十八回　献詠短歌大会

県内でも権威ある短歌大会として、年々盛大に開催しています。県内の著名な斯界の指導者の先生方をお招きして、講評と指導を受けると共に、参加者相互による批評、感想等を発表するユニークな大会として好評を受けています。

期　日　十一月十一日
開始時間　午前十時より

第十五回　奉納柔道大会

宗像地区十中学校の一・二年生による個人・団体戦。この新人戦の内容は高く評価されており、この大会で自信をつけて以後の技量が一段と進歩する実戦の場ともなっています。

期　日　十一月十八日
会　場　午後一時より本殿横境内（雨天の場合は玄海中学校体育館）

第十七回　秋季奉納盆栽展

宗像地区盆栽愛好家の集りで、宗像大社盆栽会（会長田中一男氏）を結成し、より充実した盆栽展を開催していますが、年々盛大になり会員内より選抜して展示しています。

期　日　十一月十一日～十五日
会　場　宗像大社祈願殿一・二階ロビー
観覧時間　午前九時三十分～午後五時迄（拝観無料）

三十六歌仙扁額（二十一）

宗像大社の「州信」印三十六歌仙図扁額

黒田泰三

また、神社に三十六歌仙図扁額を献納する際の時間的な差についても考えておくべきであろう。天正十八年に近い例としては、奈良談山神社の三十六歌仙図扁額は、元和五年（一六一九）の拝殿再興に間に合わず、元和七年（一六二一）、二年遅れで奉納されたという。（土居次義「談山神社の伝狩野永徳筆歌仙扁額」（土居次義著「近世日本絵画の研究」昭和四十五年十一月美術出版社）参照）天正十八年（一五九〇）六月、宗像大社辺津宮拝殿再建より一、二年遅れての制作もありえないわけではない。永徳歿後に宗像大社本が制作された可能性もありうるわけである。

挿図17　群仙図　南禅寺蔵

四　永徳一門

以上にのべたように、天正十八年の永徳自身の事情や、狩野派における画印の継承や共用の事例をかんがえると宗像大社本の比較の対象は永徳にとどまるだけでなく、永徳一門によるとされる作品との比較にまで広げざるをえないであろう。

天正十八年に前後する、狩野派永徳一門の人物表現の作例としては、天正十三、四年（一五八五、六）の狩野永徳および一門作とされる京都南禅寺大方丈御昼之間障壁画（以下南禅寺本）、同じく慶長八年（一六〇三）の作と考えられる京都妙法院大書院一之間障壁画（以下妙法院本）、あるいは逸翁美術館蔵伝狩野光信筆豊臣秀吉像画稿（以下秀吉像）文禄五年（一五九六）作の京都国立博物館蔵狩野宗秀筆日禎上人像（以下日禎上人像）などがあげられる。

挿図18　藤原興風図　宗像大社蔵

挿図19　孟宗図　南禅寺蔵

そのうち南禅寺本、妙法院本はともに漢画的画題であり、また秀吉像、日禎上人像は実在する人物の肖像画であるから、やまと絵の伝統的画題である歌仙絵とはおのずと絵画の基盤に差異がある。その差異も考慮するかぎりにおいて、人物の比例や顔面以外の部分などに注目すると、人物画表現における画風の比較はゆるされるだろう。

宗像大社本より四、五年以前の作である南禅寺本の「群仙図」（挿図17）は古くより狩野永徳筆との説があり、辻惟雄氏が指摘しておられるように宗秀筆の可能性もある。（辻惟雄「南禅寺本坊大方丈障壁画の様式および筆者について」（『国華』題九〇三号）参照）この南禅寺本と宗像大社本とではとくに衣文線に違いがみられる。南禅寺本「群仙図」には、解放的あるいは発散的ともいうべき描線の奔放さがある。それはやや煩雑でさえある。宗像大社本の慎重で洗練された集約的な描線とはあきらかに異なっている。同じく南禅寺本「二十四孝図」は永徳筆とする意見があり、辻惟雄氏は光信筆の可能性のあることを示唆している。（辻惟雄「南禅寺本坊大方丈障壁画の様式および筆者について」（『国華』第九〇三号）参照）宗像大社本の衣文線にみられる打ちこみや抑揚などは近似しているが、決定的な共通点は見い出しえない。ただし宗像大社本の藤原興風（挿図18）と南禅寺本「二十四孝図」、孟宗（挿図19）との顔面の端正でやや伏せ目がちの、上品で物静かな表情には、同一の筆者を想定させるものがある。

次号へつづく

宗像大神への奉納

敬神の念篤き方々より
神恩に感謝の真心込めて

日本画二点を奉納
福岡市の西川芳泉氏

当社斎館応接室と幽宜室に、宗像三宮心象画並びに跳鯉軸が飾られている。

これは、福岡市西区在住の日本画家、西川芳泉氏が奉納されたものである。

西川氏は旧宗像高女出身で敬神の念篤く、又青春時代の一時期を過ごした宗像の地への思慕がつのるばかりで、宗像大神へ是非絵画を奉納したいとの願いから今回奉納の運びとなった。

三月十四日二点の絵画を神前に奉安、奉納奉告祭を斎行。同氏はその後この二点の絵画を表装すべく表具師に依頼、先月美事に表装が完成し、改めて奉納されたものである。

宗像三宮心象画は五十号の大作、又跳鯉軸は滝を跳躍する鯉が力強く描かれている。

結婚式の控室、或いは参拝者の休息所等としても使用されることが多い斎館に飾られた二点の絵画は、その素晴らしい画風で人々の目を楽しませると共に心を和ませている。

日月錦旗・四神旗を奉納
市川市の秋山幸衛氏

当大社秋季大祭が斎行された、十月一日から三日まで、真新しい四神旗が当社拝殿に飾られた。また日月錦旗一対が祈願殿内に掲揚されている。

これは、千葉県市川市在住の秋山幸衛氏の奉納によるもので、四神旗は方〇・五米、黒塗台枠、高さ一・九米黒塗木製鉾、巾〇・五米長さ一・二米の旗の三点から成り、旗は総縫縁付きの優美な錦織りで、白地に青龍・白虎・朱雀・玄武の四神獣が五色で織込まれている。

日月錦旗は、巾〇・六米、長さ三米、錦地に五色の瑞雲両面引返、上部に日月が織込んである。

四神旗は、古来中国で皇帝即位の時、或は年の初め等目出度い儀式の際に威儀のものとして使用され、我国に於ても同様に用いられてきている。

去る八月下旬、秋山氏は御家族お揃いで当社に参拝され、奉納式を執り行われた。

宗像大社
氏子会総会開催
氏子奉幣使に柴田福造氏（渡区）

秋季大祭も間近に迫った九月十九日、宗像大社氏子会総会が、当大社清明殿に於て開催された。

当日は、台風の影響か玄界灘が時化模様で、大島～神湊間のフェリーが欠航、河野幸人氏子会会長や大島村の評議員・総代がやむなく欠席となったが、宗像都市各地より百余名の評議員並びに総代が出席、当大社より養父宮司以下神職並びに事務局担当神職が同席して、十月一日より三日迄の三日間斎行される秋季大祭に付、熱心且つ慎重に審議された。

定刻、出光副会長の開会の辞によって総会を開会、続いて国歌斉唱・神宮並皇居遙拝・敬神生活の綱領唱和を全員で行った。

次で河野会長代行の占部副会長、又当大社養父宮司が各々挨拶をされ、いよいよ秋季大祭斎行に関する議題の審議となった。

議事は占部副会長の議長により進行され、先ず秋季大祭の祭典並びに奉納行事の日程について宗像幽宜が説明、昨年は昭和天皇の突然の御不例により種々自粛の中での大祭となったが、本年は平成という新しい御代を寿ぎ、厳粛且つ盛大に斎行する旨発表され、一同承認した。

次に二日の例大祭に於ける氏子奉幣使に付事務局より説明、今回は当番町の津屋崎町より選出していただくようお願いし、後刻津屋崎町の評議員・総代で協議の結果、渡区評議員の柴田福造氏が各評議員の大祭期間中の奉仕依頼を行い、諸役の分担案を事務局より発表、各評議員も快諾し全ての議題の審議が終了した。

この後、最近発刊された「昭和天皇の御製」が出席者全員に配布された。

大御心をこの御製を通して拝して頂きたいという大社からの贈りものである。

総会終了後は同会場で昼食をとり、一同和やかな雰囲気の中で一刻を過ごした。

社務日誌抄

九月一日　月次祭
九月二日　薬師寺管長高田好胤氏外四名参拝
九州歴史資料館高倉主査来社
九月五日　出光石油化学千葉工場副工場長杉山實氏外四名参拝
九月七日　福岡市博物館学芸員来倉氏来社
九月八日　北九州考古学博物館長藤丸氏来社
九月九日　皇學館大学就職課長津村健治郎氏・同嘱託上田金彌氏来社
九月十日　宗像大社菊花会理事会
九月十一日　秋季大祭打ち合せ四者会談
大阪市宗像正幸氏・芦屋市岩田英子氏参拝
九月十二日　愛知県真清田神社権禰宜北島啓進氏来社
宗像記者クラブ秋季大祭外報道説明会
テレビ東京ディレクター林照敏氏外三名沖ノ島取材の件にて来社
九月十四日　沖津宮神璽迎え
テレビ東京沖ノ島祭祀遺跡等取材
九月十五日　月次祭
九月十六日　玄海町戦没者慰霊祭於宗像護国神社
出雲大社東敬神教会・同初台教会長高橋正宜氏外四名参拝
九月十九日　宗像大社氏子会総代総会
職員会議
九月二十日　NHK大阪出口氏外一名神宝撮影の為来社
福岡海上保安部警備救難課長木村茂己氏外一名来社
九月二十一日　苫小牧東部石油備蓄㈱社長吉本俊夫氏・同次長天野欣也氏・出光興産㈱福岡支店副支店長井上啓氏参拝
九月二十二日　福岡県教育委員会委員長芳賀晃寿氏外十二名参拝
宗像大社奉納盆栽展役員会
九月二十三日　㈱山二会長佐々木定男氏参拝
九月二十五日　玄海町消防団秋季大祭警備打ち合せ会
九月二十六日　新潟県獅彦ぐずぐず言うなら断固討伐二十名参拝
秋季大祭奉納風俗舞打ち合せ会
九月二十七日　宮崎県五所稲荷神社権禰宜川越篤氏外総代二十三名参拝
九月二十八日　地元総代並協力会秋季大祭諸準備奉仕
週刊朝日山本記者外一名沖ノ島取材
九月二十九日　沖中両宮奉賛会並興賛会秋季大祭諸準備奉仕
十月三日　秋季大祭総社地主祭・宵宮祭
アジア太平洋博覧会事務局明石課長来社
甘木資料館川述副館長来社

RKB文化セミナー
日本のこころを尋ねて
むなかたの海辺と杜（もり）に（九）

渡部昇一

そして日本の天皇は非常に憲法に忠実であったから、憲法のやるようにしか出来なかったと。

それである記者がですね、二二六事件の時は反乱軍だと言ったのは天皇だけなんですね。皆おろおろしちゃってどうしたらいいかわからなかったわけです。とにかく陸軍が機関銃を持って起ち上がって、警視庁はぶっ潰されたしですね、陸軍を押えるのは陸軍しかないわけですけれども、陸・陸の戦争じゃ困るし、海軍に押えてもらえば陸・海の戦争になっちゃうしですね、誰も手が出なかったわけです。

ところが天皇だけは、あれは反乱軍であると言い続けたわけです。ぐずぐずするなら私が出て行ってもいいぞと言っていることは、参謀本部に伝ったわけです。でその時の参謀本部の作戦部長は石原莞爾ですが、それを聞いたとたん、ふらふらしておった石原莞爾が、ぐずぐず言うなら断固討伐だと、こう言い出したわけです。と満州を作った人間が断固討伐なんて言ったんです。そして後は、天皇は反乱軍であると思っているということでピラを撒いたわけです、反乱軍であるぞ」と。それで一変にパッとなったわけです。

それで外国人は言うわけです。だって二二六事件の時、あの時に天皇は判断を示したんだから、本当に太平洋戦争だって嫌だったら、嫌だと言えばよかったんじゃないかというような質問をしたんですよ、外人の記者団がだいぶ前に。

そしたら天皇はですね、あの時私の処に来た報告によれば、首相以下殺されたということであった。実際岡田首相は殺されたことになったんですね。本当に殺されたのは岡田首相の弟で、大佐の岡田何とかという人だったんです。で岡田首相は押入に逃込んでいたんです。ところが非常にそっくりな弟がいたもんでそっちを殺して、顔を見ればこれは似てるなというわけで、首相を殺したということになったわけです。ですっと出て来なかったわけですね。岡田さんは、だから天皇に報告された時は、首相以下は殺されたと。それで自分は内閣が無くなったとそう判断して、ああいう発言をしたんだと。あれは、本当は首相は生きているんだと知っていれば、やるべき発言ではなかったと、こう言っているんですね。

それは、憲法の建前から言えば、天皇は直接意志を表示してはいけないわけです。何かの機関を通じないといかんのです。直接意志を発動したのは、二二六事件の時なんです。そして最後のもう一回は終戦の時なんです。終戦の時、あれは首相も内閣も、即ち軍部も大本営も内閣も、どうも話がつきませんのでよろしくお願いしますと投げ出してしまったので、それで完全に憲法体制が崩れてしまったから、天皇が止めようと言ってすぐ止めたということになったのです。その辺を非常に好意的に書いてくれてますね。びっくりしました。

それで私は、昭和の時代は二十世紀の終り迄続いてもらいたいと思うんですけれども、まあ振り返る時期になっているのかも知れません。それで振り返ってみますと、昭和という時代よりは二十世紀という世紀ですが、世紀末に近いので振り返ってみますと、どういう世紀であったろうかと。この世紀はですね、まあ世紀末と言ったって本当は時間は流れて行くのですから、末になろうとどうしようと同じじゃないかと言えば言えるんですけれども、やはり十九世紀の終りですと、世紀末現象としか言えないものがちゃんと出て来るんですね。芸術でも何でも。

だから皆が世紀末だなと言えば、時間の流れは同じようなものでも、やはりそういう現象が出て来ると思うんです。だからやっぱり二十世紀でも二十世紀末という感じがそのうち色濃く出て来ると思います。もう二・三年経ちませんと、世紀末には少し早いんですが少し先取りしまして、二十世紀はどういう世紀であったかと考えてみますと、いろんな言い方があると思うんですね二十世紀は。自然科学の発達の時期であったとも言えましょう。それから革命の時期でもあったと言えますけれど、革命は大体前半ですね。それに大戦争の時期であったと、こういう言い方も出来ると思いますが、これは第一次大戦も第二次大戦も前半です。後はどういう時代と言えますかね。アメリカの時代だと言ってもいいんだけれども、アメリカの時代は十九世紀でもそうでしたから、特に二十世紀だけがアメリカというわけでもない。

以下次号へつづく

宗像大社歌会 俳句作品集（三九）

小倉北　井手　清隆

円心を航く船遅々と鰯雲

田　熊　安部　ゆき

野仏や千草の花に囲まれて

藤　沢　井上　玄洋

踊歌目指して急ぐ夜道かな

津屋崎　西住喜三郎

大眠るそばにちゃぼ居る残暑かな

福岡中央　力丸　玄風

静寂に花火待つ閤アジア博

日の里　花田いつえ

指さして月の在り処の薄明り

福　間　広渡一寿軒

さわやかに吹く風そよぐ芙蓉かな

津屋崎　井浦　良介

みあれ神事に豊かなる雲移りゆく

鐘　崎　岩瀬　辰夫

庭の菊座して眺める茶のうまさ

田　熊　力丸　一郎

畑の土手草刈り伏せて秋に入る

福　間　二宮　末子

その顔を上げておくれよ百合花

（続）浜の寄物 41

能登の漂着神（二）

いしいただし

前回は、今昔物語第十二の鳳至の孫の途まであった。凶兆を避けて、従者と連れだって海岸へ出た。海面が盛りあがり迫ってくる……だが連れの従者には、一向に、迫ってくる恐ろしい波が見えない。

男は観念し、両手を合わせてすわり込んだ。しかし襲いかかるように近づいてきた波は、やがてだんだん小さくなり、とうとう見えなくなってしまった。

そして波打ち際に目をやると、黒く丸い物が漂っている。従者も気がつき、走り寄ってみると、蓋がしてある塗り物の小さな桶だった。それを取り上げ、蓋を開けて見ると、通天の犀の角でこしらえた立派な帯がはいっていた。「これを天がわしに賜わろうとして、あのおつげがあったのだ」と言って、帯を持ち帰った。

その後、その家は隆盛をむかえ、大福長者となり、いつしか鳳至の孫と呼ばれて、その生涯を終えた。

その人に男の子が一人おり、その帯を相続し、父と同様に長者として生活をしていたが、国司の慶滋為政が、この帯の話をきき、何とか手に入れたく、無理難題で責めたてようと、多くの郎等、従者をひき連れて、鳳至の孫の家に押し掛けてきた。日に二度の食事を出させ、それに五、六百人の人数の者が「食物に難癖をつけて食え」と命じられていたので、それは大変だった。長者は相手の言うままに調理を出していたが、滞在も、四、五ケ月もなり、長者はついに耐えかねて、首に帯をひっかけて逃げ出してしまった。国司によって家じゅうの財宝は奪われてしまった。

長者は各地を転々とするが、帯のおかげで、ひどい生活を送ることはなかった。為政の国司の任期が終わり、次に源行任がなったが、長者は鳳至には帰らなかった。

次に藤原実房という人が国司となった。長者は、各地をさまよい、年もとったので、国司のもとに行き、帰国したい旨を伝えた。国司は長者にいろいろな物を与えたので、持っていた帯を国司に渡した。その帯は関白殿に献上された。

今昔はこのように最後を結んでいる。「此レ徴妙キ財トモ不見ヘズナレバ、浪ト見ユ、火ト見エケル也ケリ。而ル間、風息ノ方世ノ福報ニ依コソ、其帯モ得メトナン語リ伝ヘタルトヤ。」

海の向うから、珍しい犀角の帯が流れ着いたのである。場所柄、大変興味があるし、その可能性もあろう。先に述べた漂着神の多さ、いまも能登には、浜を埋め尽くすほどの韓国や中国製品も多い。能登羽昨の室幹夫氏の採集されたものを見ても分かる。

能登守依直心息国得財語第四十六（のとのかみうるはしきこころによりてくにをやすめたからをうること）には、前の十二語とは類形的だが、漂着の多い可能性を述べた部分がある。

性廉直な能登守某が仏神を敬い、民を哀れみ、治国の実をあげた報いで、国内巡視の折海岸に漂着した犀角を拾う。

「浜ノ辺ヲ行クニ、海ノ息ノ方ニ、丸ナル物ノ小サキ、浪ニ付テ浮テ見ユ。守、彼レヲ何ニ」□間ヘドモ、何トモ不見ヘズ」シタル紙ヲ以テ裹タリ。其レヲ開テ見レバ、藤ヲ以テ但タル箱ヲ結タリ。其レヲ解テ、箱ヲ開テ見レバ、漆塗タル箱有リ。其糸ヲ以テ供タリ。其レヲ開テ見レバ、犀ノ角ヲ切テ重ネツ、四方ニ結ケテ入タリ。取出テ見レバ、帯ニ荒造テ、三腰ガ料ヲ入タル也ケリ」とあり。

「此レヲ思フニ、震旦ノ人ノ、風ニ合テ船ナド損ジテ、海ニ入ケルニ、持タリケルガ、不意ニ寄来タルナルベシ」と記している。

宗像大社沖ノ島 沖津宮現地大祭参拝記

田川市稲荷町　寺崎福美

「本日天気晴朗ナレド波高シ」八十五年前日本海々戦に於て敵艦隊発見の報に接し東郷大将が大本営に発した電文の一節であるが今日の天候をそのまま表現しているようである。

空はあくまでも蒼く澄み乍ら風は強く波は二米、船首が切り裂く波は怒濤となって甲板を洗い私達の頭上から滝のように襲いかかる。

私達の便船第七宮地丸は速力十七ノットの快速船で僚船を大きく引離して怒れる獅子の如く驀進する。右に左に、或は上に下に大きく揺れる船は甲板に座っていてもロープをしっかり握っておかねば振りとばされそうである。

この日平成元年五月二十七日、私達沖津宮現地大祭参拝の北は北海道から南は沖縄まで全国各地から参集した二行一八〇名は一隻の灯台見廻船と七隻の漁船に分乗して神々の住み給う沖ノ島に向っている。

昨日神湊から客船「しおかぜ」にて大島に到着、民宿に投宿する。受付は夕刻六時なので少々時間があり中津宮の境内を見学する。境内を流れる「天の川」や「天の真名井」などを見学、「バクチの木」の樹皮を笑い乍ら拾う。この「バクチの木」は田川市夏吉の岩谷鐘乳洞の入口に一本あるがまだ小さく（幹の直径が約十二糎位）それでも樹令約三〇〇年位とか、珍しい木なので市で保存する計画があるらしい。そのように珍しい木がここ中津宮の境内には数十本もあり、然も幹が四〇糎以上もあるのは貴重なものといえる。又神殿の「カツオ木」は一ケ所が丸太で、他の一ケ所は四角の柱を使っているのが珍らしい。どうしてそうなったのか理由はいまだに判らないとのこと。

受付後、祈願祭（渡島安全祈願祭）があり、その後各班に分れて係の神職の注意がある。私達の班二〇名は係の升谷氏に明日の諸注意を聞く。私達は平素白衣に袴姿の神職の姿を見慣れているのに、今日の神職は冒頭に記した通りである。九時五〇分沖ノ島に接岸、直に上陸、下着までビッショリ濡れてしまったので服を脱ぎ五月の陽光と潮風にさらして乾かす。その間に海に入って禊を済ませ、身心ともに清めて神職の指示を待つ。陽光は暖かく輝くけれども、五月の海はまだ冷たく、強い風に吹かれてその寒いこと、歯の根も合はない程にふるえ上ってしまった。

以下次号へ続く

宗像むかし話 (36)

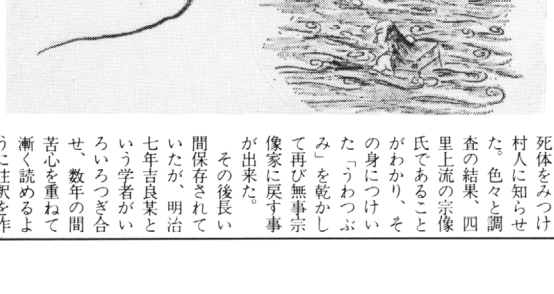
豊後の宗像家と「うわつぶみ」

今から百五十年ほど前、豊後の大友家と筑前の宗像家とは、親密な関係があった。

黒田如水と戦った石垣原で、大友義統の副将としてはなばなしい武勲をたて、壮烈なる戦死を遂げた宗像掃部の事蹟は歴史上の有名な美談となっている。この宗像氏が豊後に移り大友氏の幕下として活動した事実がある。

大分県大野郡犬飼町の奥に宗像と称する小字がある。この地は、代々宗像氏が大友氏から所領を受けて居城した土地である。大友氏の先祖、大友能直は建久七年正月、豊後豊前の守護職として、源頼朝の命を受け、鎌倉を発して豊後に下向し、居城を今の大分に設けたが、その次男大友右衛門次郎氏能は宗像大宮司氏国（第四十代）に養われ、その後しばらく宗像大社の社務に任ぜられた関係から、北九州の雄族、宗像氏と大友屋形とは深い縁が結ばれていた。

大友能直は非常に神仏に信仰が厚く遂に宗像氏の一族を招き、神に関する一切を司さどらしめ、代々子孫連綿として宗像掃部の世まで続き遂に石垣原で戦死を遂げ、その子孫は尚昔の領地犬飼の宗像に隠棲し近郷の崇敬を受け幾代か続いて来たが、その家につたわる宝物の中に「上記」と称する書物があった。伝に依ると、大友能直が、種々の学者を集めて、我が国の歴史を研究し、日本の歴史の古事記・日本書紀に誤りがあったとして、古来より伝わる日本の創業の伝説を上古文字に書き「上記」と題して、代々家宝として伝えていったが、この内容が皇室の記録とは非常に相違があるため、外部に対しては絶対の秘密を保ち、宗像家に秘蔵していたということである。

世は徳川時代になり文政年間、突然大洪水がおこり、大野川一帯をおそい深夜眼をさました時はすでに宗像家は大洪水に捲込まれていた。家財を運び出す事はもう出来ない、かろうじて宗像家代々の家宝である「うわつぶみ」を主人が肌につけ帯で体に締めあげて洪々と流れる濁流を泳ぎ出した。しかし大洪水の急流を泳ぎ切ることは出来なかった。それから流れ流れて四里下流松岡に漂着した時はすでに主人の命はなくなり、その体にはしっかりと「うわつぶみ」が結ばれていた。その時、近所の里人がこの死体をみつけ村人に知らせた。色々と調査の結果、四里上流の宗像氏であることがわかり、その身につけた「うわつぶみ」を乾かして再び無事宗像家に戻す事が出来た。

その後長い間保存されていたが、明治七年吉良某という学者がいろいろつき合せ、数年の間苦心を重ねて漸く読めるように註釈を作りながら研究を行っていた。そのうちに時の大分県知事森下景端がこのことを知り、その一部を写させ宮内省に献じ、色々と話題をまいたそうである。しかし或は偽書の説も出て色々と論議をおこしたそうだが、現在はどの様になっているか明確ではない。しかし宗像氏は現在も尚血縁の人が現存され、古き由緒のある家として近所の尊敬を受けているそうである。